

《翻 訳》

カール・カウツキー「オーストリアにおける諸民族集団の闘争と国法」^(訳注1)太 田 仁 樹
(岡山大学名誉教授)

I

現在、オーストリア君主国の政治状態ほど紛糾した政治状態は、ヨーロッパ国家ではほとんどないかもしれない。瞥見では、トルコの政治状況でさえまだ混乱は小さい。

この間、多数派とブルジョア的反対派の一部の諸手段によってだけでなく、馬鹿馬鹿しい熱狂を煽り立て情熱の爆発を両面で刺激する取るに足らない目的によっても、オーストリアの議会はまさしく精神病院に匹敵した。そのために議会の機構全体が停止し、1898年——3月革命にとつてだけでなく、少し前にはなお全く平和的に過ぎ去ると見込まれていた、フランツ・ヨーゼフの統治にとつても50周年記念日だった——には、ヴィーンの反乱、プラハの軍法会議、議会の停止の序幕が始まった。

そのすべての原因は、言語令、すなわち、実際にはバーメンで官職についている200～300人のドイツ人官僚がチェコ語を理解するよう強制されるべきか否かの問題であった。言語問題が法律の代わりに省令によって処理されることは、確かに望ましいことではなく、また言語令は確かに余計な厳格さを含むものであるが、オーストリアは、全く違うものを平静に引き受けることに慣れている。それでは、どうして生きるか死ぬかの狂気の闘争が突然起こったのか？

このことは、言語令の中に最近の闘争の対象を見るのではなく、その原因がより深いところにある信号を見ることで理解できるだろう。バデーニの戦術も、オーストリアの現在の状況を説明するのに十分ではない。「激昂した手」の拙劣で野蛮なやり方が、既存の対立を先鋭化し有毒化するのに大いに寄与したが、それが対立をつくりだしたのではないし、それゆえ、バデーニの放逐は、それが避けられないものになっても、状況の解決にほとんど役立たない。それは巻き込まれた袋小路からオーストリアを引き出すプログラムで、政府に席を用意したが、同時に次のことを示していた。すなわち、そのような政府はオーストリアの支配階級と諸政党には見出しえないこと、その案出者がなお存命しているにもかかわらず、この英知がすでに二つの内閣の前で破綻したターフェ伯爵の英知である「その場のしぎ」を今なお超えるものではないことである。

今日の状況の原因は、指し手の間違いや大臣の無能というよりも奥深いものである。それは、オーストリアにおける諸民族集団(Nationalitäten)と諸階級の独特な発展と密接に結びついている。

われわれは、とりわけ前者をスケッチしてみよう。

近代的民族理念(die moderne nationale Idee)の飛躍は、ヨーロッパ全体で近代諸国家の出現をもたらしたが、それは「あまりに一面的な唯物論的」マルクス主義の批判家が主張するような単なる詐欺や幻覚ではなく、諸民族(Völker)の欲求に深く基礎付けられたものである。特にわれわれには、その発展において三つの要因が印象的に思われる。まず、内部市場を確保し、できるだけ外部市場を拡大するというブルジョアジー、商品生産者一般の欲求がある。それは外部への閉鎖と共通の外的競争者に対抗する連合へと導かれる。この欲求に民族国家(National-staat)は最もよく照応しうる。だが一国家内に様々な民族(Nationen)が一緒に住んでいる場合には、言語境界(Sprachgrenzen)がかなり関税境界(Zollgrenzen)に代替する。言語は確かに交通の重要な手段である。言語領域の連合と拡大、およびそこからの異言語との

競争の排除は、内部市場の確保にとって、他の場合の民族国家の独立の大きさと同じくらい重要なものになりうる。

近代的民族理念の第2のルーツは、政治的自由、民主主義への志向である。われわれはその経済的諸条件をここで明示しないが、それは今世紀中にすべての近代的文化国家において強力に発生している。それは、人民（Volk）の完全な主権への志向である。人民は、その運命を自由に決定するのを望み、個人であれ、階級であれ、他民族であれ、どのような外的強制にも反抗する。

近代的な民族的志向の第3のルーツは、民衆（Volksmasse）のなかでの文書的民族教育（literarische nationale Bildung）の普及だと思われる。それは本質的に、19世紀に特徴的な現象である。個々の例外を捨象すれば、以前には、民衆詩（Volkspoesie）やある種の民衆知（Volkswissen）が見出される。それは口承の伝統を基礎とし、個々の村落自治団体（Dorfsgemeinden）や都市自治団体（Stadtsgemeinden）の地方的隔離を克服していないもので、それと共に文書（Literatur）がある。それは貴族の少数者の特権であり、民衆生活（Volksleben）とは疎遠で、ある時期は異言語が使用され、圧倒的に民族の枠を超える性格（internationalen Charakter）を帯びていた。後に、時おりフランス語が、フランス以外でも、文書語（Literatursprache）としてラテン語に続き、結局より民族的性格（nationalen Charakter）を帯びた文書においてラテン語が民族語（nationale Sprache）に駆逐されるが、それは発達したブルジョアジーをもつ大民族の内部においてのみであった。小さな、特に経済的に遅れた諸民族は、その精神生活を固有の書物文書（Buchliteratur）の高みに押し上げることができなかった。彼らはそのための著者も十分な量の読者も生み出す力がなかった。

19世紀に、大衆のための学校教育が経済的に必要になり、経済的および政治的生活は、大衆がより広い地域で互いに意思疎通し、より広い地域で迷妄を脱するよう強制する。書物文書と並んで、新聞文書（Zeitungsliteratur）が生まれ、双方とも人民の一層広い範囲に浸透する。それによって、小民族もまた固有の文書のための基礎を保持する。第1に新聞文書は、質的には確かにしばしば非常に疑わしいものであるが、確かに、より高度な形態のオリジナルな民族的文書のための土台を用意し、大衆にその言語的共属性の感情とその民族的特性を初めて意識させる。

これらの近代の民族運動のルーツのすべてが、近代社会の発展傾向に深部に触れている。それは、歴史的に最高に正当なものであり、その成長へのどのような人為的な妨害も、社会発展への妨害を意味する。

プロレタリアートはこのような種類の民族運動に敵意を抱いていないだけでなく、その絶え間ない前進に大きな関心をもっている。それはまた、スイスの例が明らかに示しているように、一つの国家に複数の民族集団が共住している場合には、必ずしも諸民族（Nationen）相互の闘争を意味するものではない。オーストリアの今日の民族闘争を、人種間の生存闘争、自然の命令というダーウィン主義的な決まり文句で説明し、青年チェコ党のパデーニとの政治的な取引や道化者ヴォルフの騒ぎを、自然力の作用だと見ることは、笑うべきことはない。

だがそれゆえ、近代の民族意識が存在する限り、オーストリアにおける民族闘争が近代の民族的傾向の必然的な産物であり、消えることはありえないだろうという想定も、われわれには正しいと思われたい。むしろオーストリアの非近代的な性格、封建的で絶対主義的な廃墟に、民族的志向が非常に不幸で馬鹿げた民族的不和を燃え立たせた主要責任があると、われわれは考える。そして、封建制と絶対主義の残滓の一掃がその克服の唯一の可能な道だと、われわれは考える。

オーストリアは、今までは、近代的統一国家の形成に成功していない。それは、今日なお本質的に国家と都市の塊である。それは一つの結合平面で婚姻関係を結び——汝幸いなるオーストリア、結婚せよ——、王朝がその高貴な結合手段となっている。

それは、前世紀の後半まではなお無条件に有効であった。マリア・テレジアは、ハンガリーの女王、チェコの女王、シュレージエンの女公等であったにすぎない。彼女は国家行政をより統一されたものにしようとしたが、息子のヨーゼフ2世が初めて統一国家をつくり、個々の領邦における身分的特権を廃棄し、国民大衆全体を同一の官僚層と軍隊の支配に服させる決定的な試みをおこなった。だが、その体制は、当然にもドイツ人のものだった。王家がドイツ人のものであっただけでなく、まさに啓蒙専制が基礎としていた、上昇志向の階級である知識人とブルジョアジーも、国土全体においてほとんどドイツ人であった。

だが、ヨーゼフ2世は失敗した。封建的分立主義は彼よりも強力であった。フランス革命がオーストリアを初めて統一国家の理想に多少近づけた。それはドイツ人の「神聖ローマ」帝国を粉碎した。フランツ2世は完全に価値のなくなっていた皇帝の王冠を放棄し、オーストリアの皇帝の称号を身につけた（1804年）。この新たにつくられた「オーストリア」は60年を大きく超えて存続することはなかった。1867年に、それはオーストリア＝ハンガリー君主国になり、その一部はハンガリーと呼ばれ、他の一部は「帝国議会に代表される諸王国と諸邦」と呼ばれた。この称号は、オーストリアが近代国家という状態からいかに離れているかを、証拠立てるものにすぎなかった。

メッテルニヒの下で、絶対主義の集権化はその絶頂に達した。しかしながら、今や個々の「諸王国と諸邦」を押しつぶすものは、ヨーゼフ2世のような大胆で人道的で進歩的な絶対主義ではなく、その代わりに、臆病で思想性の乏しい、だがますますいかがわしい、至る所に警察間諜のいる、警察による後見と抑圧の体制であった。

その耐え難い圧迫に対して、今世紀前半に、オーストリアすべての民族（Völker）が徐々に起ち上がった。そこでは、上述の諸条件が、民族感情と民族独立と統一への志向を奮い立たせ、どんな権力も押しつぶせない民族運動をつくりあげた。彼らはすべて最重要な敵として既存の絶対主義と闘わねばならなかったが、すべてが同じようにそうしたわけではない。

オーストリアの重要な構成要素で、経済的に最も遅れていたのが、ハンガリーとガリツィアであった。だが、それゆえにこそ、そこでは卑屈な宮廷貴族と並んで、強力な田舎紳士が現れた。彼らは、国家をその手中にしていた時代に郷愁をもっていたが、それは近代的な意味での民族国家ではなく、マジャル人およびポーランド人の独立だけでなく、こちらではクロアチア人、ルーマニア人、スロヴァキア人に、時にはルテニア人とドイツ人に、またあちらでは多数のルテニア人住民に対する支配を意味する封建国家であった。近代的民族運動の萌芽が、奇怪な封建的追憶と混じり合っていた。もちろん、運動が主に反対派的なものである限り、自民族の解放への衝動はますます目立って西欧民主主義に強力な同盟者を見出すことになる。しかし、この民族運動の顕著な成果のどれも、民主的な見せかけを脱ぎ捨て、反動的な核を透かし見せるのに十分であった。1815年から1848年の全般的反動の時代のただ中には、もちろんこれはあまり気づかれなかった。オーストリアの絶対主義には、ハンガリーを一時的にでも完全に押さえつけておくことは不可能だった。封建時代から受け継いだハンガリーの議会は、人民の自由と自決の権利を公に宣言することのできる、当時のヨーロッパで数少ない場所であった。

ハンガリー人とポーランド人の民族運動に劣らず、ドイツ人の民族運動も矛盾の少ないものではなかった。

すでに見てきたように、ドイツ人はオーストリアで経済的に最も進歩的な民族（Nation）を形成しているだけでなく非ドイツ人の諸民族（Nationen）の中でもそのブルジョアジーと大部分の知識人を形成している。その上に、それは高度に発展した西欧の政治的・文書諸潮流と密接な接触をもつ唯一の民族であった。だから、ドイツ人はブルジョア的自由主義の本来の代表者であり、君主国で最も進歩的な民族となった。

だが、ハンガリーとポーランド人と同様、彼らも特権的な地位をもっていた。オーストリアが中央集権

的な統一国家という理想に近づくほど、この地位はますます確実で重要になった。その点では、ドイツ人はもともと国家を支える帝国民族（Nation des Reiches）を形成していた。だが実際には、この理想は、ドイツ人の官僚層、ドイツ人の軍隊、ドイツ人の警察が絶対的に支配することによって、他のすべての民族（Völker）の独立を抑圧することでのみ達成することができた。同じドイツ人が、絶対主義がドイツ人層に向き合うところでは絶対主義と断固として闘い、絶対主義が他の諸民族を奴隷にしているところでは絶対主義に賛成していた。ドイツ系オーストリア人の民族運動も、決して完全に近代的なものではなく、その理想は過去の中にあり、確かに封建時代ではないが、断固たる絶対主義的な突撃の時代の中にあった。ヨーゼフ2世の名前は、自由主義的ドイツ系オーストリアにとって、過去の輝かしい思い出、尊敬すべき聖遺物であるだけでなく、未来へのプログラムでもあった。

非ポーランド系スラヴ人の状態はドイツ人、マジャル人およびポーランド人のそれとは違っている。ここではその民族集団（Nationalitäten）の中の最も重要なものとしてチェコ人だけを観察する。スロヴァキア人、クロアチア人およびルテニア人とともに、彼らは被抑圧住民大衆の主要部分を形成している。^{（原注1）}それは偶然ではない。これらの民族（Nationen）は支配階級をもっていない。彼らは、小市民、農民および賃金プロレタリアートの端緒から構成されている。バーメンにおけるチェコ人民族集団の支配階級は30年戦争の時代にハプスブルクの反宗教改革によって抹殺され、ドイツ人、すなわちドイツ人貴族、ドイツ人高位聖職者、ドイツ人ブルジョアジーに置き換えられた。

これらの種族集団（Völkerschaft）、特にチェコ人のもとは、本稿の初めに掲げた理由で、とどめ難く成長する民族的運動は、そもそもの初めから主に小市民的・農民的な性格を帯びていた。かくして、それは民主主義的であらざるをえなかったが、ドイツ人のブルジョア自由主義の民族運動やマジャル人およびポーランド人のユンカー的反対派の民族運動よりも、根本的に民主主義的であり、かくして、民族的と称する他の運動よりも動揺しやすく不安定であらざるをえなかった。周知のように、小市民は半ば資本家半ばプロレタリアという矛盾を体現している。今日の国家においても、彼らの状況は矛盾に満ちたものである。民主的な制度のもとでのみ彼らはその利益を確保することができるので、政治的には当然にも民主主義者であらざるをえない。それゆえ、絶対主義的に統治される共同社会では、彼らは政治的に革命的であらざるをえない。だが、他の面では、経済的な利益に迫られて理想を過去に求めて、経済的必然的に反動的になる。あるときは自己を資本家として感じ、他のときはプロレタリアと感じ、あるときは革命的であり、次にまた反動的になる。さて、オーストリアにおけるように矛盾に満ちた諸条件のもとで矛盾に満ちた階級が担う運動を考えて見よう！ どんな民族運動も、チェコ人の運動のような対立の中では発展することはない。それは、内政での急進的民主主義、および外政でのツァーリ的な絶対主義への臣従を、同時に完遂しようとする。今日、フス信徒としてほとぼしり、明日、イエズス会と手に手を取って行く。今日、帝国における自由の力強い支えとなり、明日、絶対主義体制に熱誠をもつ警官業務をおこなう。今日、大逆と反逆に専念し、明日、最も屈從的なビザンチンの追蹤に身を捧げる。

この運動も過去の中にその理想を求めていたということは、驚くべきことではない。全盛期を過ぎた階級としての小市民層は、もともと過去を美化して、「古きよき時代」を理想と考える傾向がある。そのような傾向は、歴史家や弁護士に少なくない。チェコの人々の民族運動の指導者たちが主にリクルートしたのは、まさにこのような輩からであった。彼らはその要求を古い権利名義で基礎付けることに慣れている。周知のように、ドイツ人の教授や弁護士においても、ドイツの統一は、近代的諸関係に起因する必然性としてではなく、古いバルバロッサ^{（訳注2）}の時代からの理想的な遺産と見なされていた。

だがチェコ人にとっては、前代の記憶は、ドイツ人にとってよりもずっと大きな意義をもっていた。チェコ人にとっては、ドイツ人にとって以上に、詩人や儀式で祝辞を唱える者が陶醉する魔術であるだけでな

く、非常に真面目な現実政治家に道を教示する生き生きした力でもあったからである。

これを理解するのは困難ではない。近代の民族運動の出現に際して、チェコ民族(Nation)がいかに弱く、かつ軽んじられていたか、それに較べて、ドイツ人の「神聖ローマ」帝国が恐れおののいたフス信徒の時代やブシエミスル朝のオタカール2世の時代のような過去が、いかに卓越していたことか！ かのベーメン王は、オーストリア公国、シュタイアーマルク、ケルンテン、クライン、要するに今日のオーストリアの中核を支配していた。古いヴァーツラフ王冠領の再建こそが、チェコ民族が再び生き生きとするのに必要な前提条件であった。そして、この国家の諸要素はなお存続して、オーストリアは統一国家となるにはなお遠かった。シュレージエン公国、メーレン侯国、およびとりわけベーメン王国がなお存在したのである。なお、ベーメン邦議会が存在したが、中央権力からそれを独立させ、それに力を獲得させる必要があり、古い栄光を再建するための基礎が据えられた。だが、邦議会を中央権力から独立させる努力の中で、チェコ人は、封建時代の残滓である身分制議會を支配していた封建貴族と出会った。かくして、ベーメン国法はチェコ人民族運動と封建貴族の同盟を準備した。そこで民主主義的な性格が優位を占めたとき、それは一時的に破壊されたが、遅かれ早かれまた更新され、しばしば闘争は自由主義的ドイツ人あるいは中央集権主義に向けられた。封建的分立主義と民族的分立主義は手を握った。

こうして、われわれは、オーストリアにおいて一連の民族運動を見出す。どの運動も、少なくとも一部は近代の諸要因に起因するもので、それゆえ抑え難いものであるが、その目標を、過去の生命力を失った形で実現するよう駆り立てられている。それは、長い間役に立たない暴力手段をもう全く使用しないか、一時的にしか使用しないことで、不自然なものになる可能性がある。オーストリアの民族運動に生命力があるほど、その目標は実行不可能である。これが今世紀のこの帝国の発展が苦しんでいる矛盾であり、ついに今日の状況に帰結したものである。

絶対主義がすべての人びとを威圧している限りは、その矛盾はあまり露呈しない。それに対し、圧力が緩むとすぐに矛盾が現れる。ドイツ人とハンガリー人は、1848年の3月革命においてメッテルニヒ体制の桎梏を振り払った。スラヴ人がいたるところで彼らに続いた。だが、すぐにドイツ人とマジャル人の自由の先駆者は、スラヴ人の独立を打ち倒し始めた。ドイツ人の自由主義者こそが、プラハのスラヴ人大会のときにヴィンディッシュグレーツを促して、チェコ人に対して暴力でもって干渉し、後のカラーの武断政治や最近の軍法会議の規定のときと同じ歓呼でもって砲撃を迎えたのだった。ヴィンディッシュグレーツは、「フランクフルトのパウロ教会からだけでなく、いや、チェコ人へのドイツ人層の復讐者としてのヴィーン議會でも賛美された。^(原注2)」だがチェコ人を虐殺した同じヴィンディッシュグレーツが、ドイツ人の自由を絞殺するためにドイツ人のヴィーンに対して逆らったとき、チェコ人の喝采をえた。プラハを火にかけた同じ大砲が、ヴィーンを火にかけるため出發するとき、プラハ市民によって花を飾られた。

その間に、ハンガリーでは、それと対照的なことが起こった。ベストの新しい民族政府(nationale Regierung)が、古い「イシュトヴァーンの王冠領」の様々な構成部分を纏め、かつ古いハンガリー国家の非マジャル系種族集団(Völkerschaft)であるルーマニア人、セルビア人、クロアチア人をより強力に鎮圧する手段を用いて、活動を開始した。ハンガリー政府に対して彼らが反抗したとき、ハンガリー人はスラヴ人の独立意欲を押しつぶすために軍隊を動員した。これがヴィーンの宮廷とのハンガリーの紛争の出発点を形成した。ヴィーン宮廷は、当然クロアチア人をハンガリー人の敵として引き受け、ついにはハンガリー人の反乱者によるハプスブルク王朝の廃位に帰着するような規模になる紛争を引き受けた。だが、クロアチア人は、イエラチッチの下で、反動の最も熱烈な擁護者になった。彼らはヴィンディッシュグレーツの部隊と同盟してヴィーンを抑えつけた。だが、反動は、ロシアの援助のもとに初めてハンガリー人を制御したのである。

1848年の反乱が成功しなかったことを、ナポレオン〔3世〕とビスマルクが継承した。1859年と1866年の戦争で、彼らはオーストリアの絶対主義をその核心まで揺るがした。ソルフェリーノとケーニヒグレッツの砲声は、自由主義体制の開始を告げたが、その体制は極度に弱々しい出来損ないであり、オーストリアを完全な近代国家に転換させるのは直ちに断念された。新しい中央議会は普通でも平等でもない選挙権を基礎として、全く封建的な手本に従う身分制的な選挙団体をなお保持していた。中央議会は、初めは帝国議会の構成員を選ぶ個々の邦議会の委員会にすぎなかった。1873年に初めて個々の選挙区の直接選挙が導入された。オーストリアは民主化されないだけでなく、市民的国家（ein bürgerlicher Staat）にすらならなかった。

だが、この自由主義が憐れむべきものであるほど、それは少なくともオーストリアの諸民族（Völker）に若干の活動の自由をもたらしすでに進まざるをえなかった。だが、このことはドイツの中央集権的自由主義が前進のたびにその死に向けてさらに一步進むことを意味した。

すでに体制側は統一を諦めかけていた。それゆえ、ハンガリー国家の独立を承認し、マジャル民族（Nation）の独立だけでなく、ルーマニア人、スラヴ人および（ジーベンビュルゲンと西部境界地域での）ドイツ人に対する統治権をも認めていた。ドイツ人自由主義者は西部オーストリアのスラヴ人をますます確実に意のままにするよう望んでいた。

だがあらゆる方策にもかかわらず、ドイツ人のブルジョアジーは、封建貴族、アルプス地方の小市民＝農民的な分立主義者およびスラヴ人の合一した奔流に対抗できなかった。チロール人、ダルマチア人、ポーランド人は特権をもっていた。ポーランド人は、徐々にガリツィアのほとんど完全な自治を獲得していた。すなわちハンガリーにおけるのと同様、ここでも、固有の民族（Nation）の独立だけでなく、他民族であるルテニア人に対する支配権をもっていた。

ドイツ人ブルジョアジーは、彼らにとって最も危険で重大なチェコ人の民族運動の鎮圧に全力を集中した。だが、ベーメンは君主国で最も豊かな土地であり、ドイツ人ブルジョアジーはその特権的な搾取者であった。しかし、チェコ人を意のままにすることもできなかった。彼らを押さえつけるよう努力するのに、ドイツ人ブルジョアジーはその最大の力を傾注した。彼らは、チェコ人の民主派と合同すれば、封建的で絶対主義的な諸要素を打倒することができたかもしれない。チェコ人市民層とのドイツ人市民層の闘いは、封建的・教権的反動を強化しただけであった。すでに70年代にドイツ人自由主義者は完全に活力を失い、反抗的なチェコ人がいなかったら、旧オーストリアの統治システムは再び中断されることなく始まりえたかもしれない。チェコ人は、ヴィーンの中央政府に精力的に抵抗して、その国法の、すなわちハンガリーに類似した「ヴァーツラフ王冠領」のベーメン、メーレンおよびシュレージエンの諸邦の独立の承認という幻想に立脚し、長年にわたる反対党としてなお強力な民主主義者として振舞っていた。狡猾な熟達者ターフェは、暴力でチェコ人を鎮圧できないので、彼らを腐敗させようとした。実際、彼はチェコ政治家の多数派である老チェコ党を、若干の譲歩と準譲歩を承認することで、国法的で民主主義的な傾向の放棄へと動かすのに成功した。だが、チェコ民族（Nation）は小銭で買うことはできなかった。ターフェは老チェコ党の完全な破産を達成しただけであった。老チェコ党は90年代初めに急進的な青年チェコ党によって全く押しのけられた。

それによりターフェは途方に暮れた。オーストリアの統治技術の従来の手段では、オーストリアの統一国家は、もはや維持できなかった。それは新しい道を探らねばならなかった。ドイツ帝国をまとめているような絆が「帝国議会に代表される諸王国および諸邦」をも結合すべきであった。ターフェは普通選挙権を承認し、それによって、その間に強力に増大したプロレタリア運動を少なくとも一時的に宥め、より平穏な水路に向けることができるようにしようとした。

彼に続く連立内閣が、オーストリアにおいてチェコ人に反対する統治はもはやありえないということを証明したことで、ターフェは失脚した。その上に、バデーニの運命は、ドイツ人に反対する統治もありえないということを証明した。それは一般的な思い出の中にある。だが、ガウチュ内閣は、チェコ人とドイツ人が同時に既存の基盤の上で統治されることはありえないということを証明するよう定められているように見える。

今度は何か？ オーストリアにとって、すべての議会的統治技術の終わりが来たように見える。そして、多くの人はすでに絶対主義の幽霊が再び現れているのを見ている。だが、ゲルマン化し中央集権化しつつある古い絶対主義は、スラヴ人の優勢な今日のオーストリアの中ではいよいよ不可能になっている。絶対主義、すなわち今日ではウィーンの官僚層が国全体を中央議会の代わりに17の邦議会によって統治することは、馬鹿げたことである。ドイツ帝国と同様、オーストリアの君主制は、すべての遠心的な傾向をなすがままにしようとしなければならぬ、中央議会なしで済ますことはできない。

絶対主義体制に対立する他の要因を度外視すれば、今では、すでにそれだけでオーストリアでそれは不可能である。だが、絶対主義によるのと同様、外部からの介入によっても、今日の困難を解決することはできない。帝国の種族の兄弟（*Stammesbrüder*）を調停して、彼らを助け、スラヴ人の突撃を跳ね返すべきだと考える単純なドイツ人が、オーストリアにいる。ドイツ帝国にさえ、このような期待を共有する者はいないというのに。

ドイツにおける新航路政策は、疑いもなく非常に冒険的なものである。それは、給炭拠点のために東アジア全体の問題を提起し、世界平和を問題にすることをためらわず、しかも「海賊」ジェイムソン^{（訳注3）}の方法と宿命的に類似した方法でおこなうのである。もちろん、ジェイムソンのトランスヴァール介入と膠州湾の占領とは、違いもある。トランスヴァールでは小部隊の冒険家の私的な企てが問題となっていた。彼らは、その戦闘力において英国人たちに不利であることがすでに繰り返し確かめられていた優勢な敵を攻撃した。膠州湾の占拠においては、その無防備さと無力さがよく知られていた一国家に対する第一級の強国の公式な企てが問題である。もし騎士道を語ろうとするなら、確かにむしろ、この語句はジェイムソン事件に認められねばならないだろう。

だが、これはついでのことに過ぎない。われわれが新航路の冒険欲を高く評価しようとするなら、世界で神以外の何物をも恐れないドイツ人層を窮地から救うために、オーストリアに進駐することはおそらく考えられないことではない。オーストリアの君主制がなお意味のある抵抗力をもつということだけでなく、スラヴ人以外にアルプス地方のドイツ人も最も頑強にその完全さを護るであろうということだけではなく、オーストリアの独立を毀損するどのような試みも、最も恐ろしい世界戦争を引き起こすであろうということだけでない。その際、最善の場合でもプロイセン＝ドイツは何を獲得することができだろうか？ [ドイツ]帝国におけるプロイセンの覇権の完全な否定に帰結するかもしれない諸要素の受容。そして、それゆえプロイセンの統治が正統な王位を侵害することになるのではないか？ プロイセン政府が、このような革命的手段に従事することをあえてするようなときは過ぎ去った。

オーストリアのドイツ人は、ドイツ帝国から、若干の文書家と儀式で祝辞を唱える者の道徳的な憤激以外に、絶対に何も期待することができない。矢車菊の騎士^{（訳注4）}の希望は、いかに状況が混乱しているかを示す幻影に過ぎない。だがそれは迷宮からの出口を示すことはない。今日の困難の克服が可能であるとすれば、外部からではなく、内部から来るに違いない。

II

今日の状況の困難はどこに起因するのか？ 民族運動の生命力とそれが志向する諸形態の生存能力の欠如との間の矛盾にある。オーストリアの民族運動は諸民族（Nationen）の独立を保証する国家形態の獲得あるいは保持をではなく、個々の民族あるいは民族部分が独立しないことと不可避的に結びついた形態の獲得あるいは保持を志向している。ドイツ人も、ハンガリー人も、ポーランド人も、チェコ人もそうである。ベーメン、メーレンおよびシュレージエンにおけるチェコ人の独立だけでなく、これらの諸邦のドイツ人マイノリティのチェコ人支配への服従をも意味するベーメンの国法の実現と事態のこの急接近が、オーストリア全体のドイツ人をしてチェコ人層に対する最近の憤激を引き起こさせた主要因である。言語令は、それ自体としてはかなり無害なものであり、細かい点で改良できるものであるが、現在のものでは、ドイツ民族にとって脅威となるものは含まれていない。だが、それはベーメンの国法の実現の先駆けとなり、チェコ人の優勢の下にベーメンのドイツ人を引き渡すことの前触れとなり、バデーニが陰険で野蛮な試みによってそれを鎮めようとして、なお一層大きくし、ポーランド人伯爵のバデーニが凶暴に追い払われることになる嵐を引き起こした。

オーストリアでは、中央集権主義は不可能になった。オーストリアは、なお連邦国家としてのみ存続できるが、伝来の「歴史的・政治的」な諸個体の連邦主義、すなわち諸王国と諸邦の連邦主義は、中央集権主義と同じく生存能力がない。

残る可能性は一つだけである。諸民族集団の連邦制（Föderalismus der Nationalitäten）、伝統的な地方境界（Provinzialgrenzen）の粉碎、言語境界（Sprachgrenzen）に基づくオーストリアの新編成である。

フランスの大革命の人びとが、古い地方境界を廃棄し、フランスに県の新設をおこなったとき、彼らは何をしたのかを知っていた。それによって、統一国家に最も確実な根拠を与え、封建的な分立主義を完全に否定し、結局封建的な記憶を強力に停止したのである。

オーストリアにとって、同様な編制替えが必要である。今日なお最新の民族運動を不可能な状況にしている封建的ボロ屑を国法から除去しよう！ 個々の民族を切り刻んでいる領域的な境界（territoriale Grenzen）を除去しよう！ 様々な民族を互いに縛り付け、憎しみや争いに煽り立てている諸民族の境界を除去しよう！ 諸民族は、自由で互いに平等に協働すればオーストリアを第一級の文化国家にすることができるだろうが、民族間の闘いによってどんな進歩も妨げられている。

ドイツ人自身が、このことを理解し始めている。彼らは、ベーメンの行政区分を要求するこの方向への臆病な試みをおこなっている。ベーメンは、それぞれ固有の官庁言語および学校言語と行政をもつドイツ人部分とチェコ人部分の二つの部分に分けられるべきである。だが、両部分は、衆議院と貴族院のようにどんな仕事においても互いに牽制できるような、特別なクリアを形成するベーメン邦議会に代表を派遣すべきである。これが1890年にターフェ内閣がまとめたドイツ人と老チェコ党の妥協の基礎である。だが、それは青年チェコ党の成功によって水泡に帰した。それは純粋にオーストリア的なつぎはぎ細工である。この改革は古いベーメン王国の概念の前に臆病にとどまっている。一つの行政単位にチェコ人とドイツ人を強制的に合同することはそのままであり、封建時代に発するクリアという応急措置が新たな変種を増やして、近代的統一国家へのさらなる一歩ではなく、封建的分立主義へと逆方向にさらに一歩いくものとなっている。

近代の統一国家は、一層の自治によって、その細区分に非常によく調和しているが、それはすべての部分が対等な権利を保持しているような場合にだけである。ベーメンの二分割は、特別な一地方に特別な社会層の特権を新たにつくることを意味している。諸民族の基礎の上にオーストリアを組織するという考え

と二分割というのは、普通、平等、直接選挙権で選ばれる唯一の議会という考えと五つのクリアということと同様である。

それはベーメンのドイツ人を多数決から守るかもしれないが、ベーメンそれ自体では、決して民族的争闘を終わらせないだろう。どちらのクリアも、互いに相手を麻痺させるのに十分な仕組みをもつだろう。メーレンとシュレージエンにおけるチェコ人問題、ガリツィアにおけるルテニア人問題、チロールにおけるイタリア人問題、シュタイアーマルクとケルンテンにおけるスロヴェニア人問題、これらは、すべて解決されないまま、それによって民族的排外主義の十分な燃え木となり、それはますます鮮やかに燃え上がり、今日の状況を果てしなく長引かせるであろう。

ドイツ人は、ベーメンのチェコ人から切り離されねばならないが、彼らが邦議会で再び一緒になるのを望まないように、完全に切り離しておくべきであろう。だがそのためには、ベーメン、メーレンおよびシュレージエンの関連するチェコ系言語地域（Sprachgebiete）をドイツ系ベーメンの県および郡と同じ法的基礎で一つの自治的行政地域に統合しなければならない。様々な言語地域をもつ他の地方においても、同様に取り扱うべきであろう。

言語問題のこのような全面的で原則的な解決だけが、オーストリアにどうにか民族平和をもたらさうであろう。それは、伝統的で深く根を張った対立をすぐに克服しないだろう。それは、プラハにおけるドイツ人やヴィーンにおけるチェコ人のような小地域での言語島（Sprachinseln）や民族的マイノリティの処遇のような二次的な性質の民族的諸問題を除去しないであろう。だが、これらの諸問題は、政治的および社会的な改革という大きな一般的国家的諸問題の背後に退き、政治生活のすべてを支配したり掻き乱したりすることはなくなるであろう。そして、それらは近代的な政治戦術の手段によって解決されるであろう。

では、民族集団問題（Nationalitätenfrage）の解決への力はどこから来るのか？ 今日のオーストリアを支配している封建的諸要素は、手を尽くしてそれに抵抗するだろう。民族的不和と分立主義的伝統は、やはり、彼らの力の確実な基礎をなしている。封建的・教権的な勢力に解決を押し付ける力をもつよりも、むしろ、敵対的な諸民族が言語問題の目的にかなった解決について和解しなければならないだろう。だがそのためには、チャンスは少ししかない。どの民族も征服した土地を少しも放棄したくない。それは、すべてに同じ権利を承認することと同じくらい実現とは程遠いことである。ベーメンの二分割を要求するドイツ人自身が最高に憤激するかもしれないが、彼らは、民族的に関連する三つの言語地方（Sprachenprovinzen）——ドイツ系、チェコ系、ポーランド系——へのシュレージエンの分割、あるいは、シュタイアーマルクとケルンテンの二分割、およびこの地方のスロヴェニア系の部分とクラインとの単一のスロヴェニア言語地方への統合に同意するべきであろう。

ものごとは、小市民層と小農民層の獲得している立場によって、よりよくなることはないだろう。

われわれは、従来オーストリアの歴史の、民族的な闘争の特性に光を投げかけるような諸要素だけを強調してきた。だがこれらと同時に、ヨーロッパの他の諸地方と並行した社会的・政治的な発展が生じた。とりわけ60年代末から、住民の全階級あるいは少なくとも小市民層と小農民層に広がった選挙権の拡大が見られる。だが、後二者の階級が、新しい権利を使用することを学び、その力を意識し始めるにつれて、彼らはそれまで服従していたブルジョア的自由主義を見捨て始めた。小市民と農民は将来のブルジョアとして確信をもって自覚し、封建主義と絶対主義の克服によって彼らにブルジョアの福祉の道が開かれるのを期待した。そうはならず、彼らのうちの過半数にはプロレタリア化への道が開かれた。この過程を阻むのにリベラリズムが無力であることが明らかになるほど、ますます彼らはリベラリズムから離れ、「自助」では期待できない救済を国家に期待して、ますます熱心に政治活動に向かうようになった。社会民主党は、

プロレタリアートに国家権力を奪取しその目的に役立てるように促すことに、全く関わりがないわけではない。だが、彼らは国家権力を奪取し、経済的發展の障礙を除去しなければならない。没落する小市民は、国家権力を経済發展に対抗させようと望む。社会民主党は、プロレタリアートだけでなく全社会の利益のために、既存の社会形態をより高い形態へと引き上げる梃子だと、国家権力を考える。零落する小市民は、中世的生産形態の残滓を永遠に保持し、社会によって国家に食わせて貰わざるをえない国家の受給者になることで没落する諸階層を保全する手段としての国家権力に訴えている。

このような国家援助は、社会主義の反対物である。それに対して、本質的には没落しつつある封建貴族は、経済的な征服以来このような国家援助によってその存在を維持していた。だから、小市民のおよび農民的な救い手同士の同盟は、「民族的事業 (nationalen Arbeit)」の自然の成り行きであった。それはブルジョアの自由主義の没落を決定づけ、ヨーロッパ大陸、なかでもドイツとオーストリアの政治的特徴的な指標となった。

この同盟は、ドイツ帝国における分立主義の強化や、オーストリアにおけるスラヴ人の民族運動の強化に大いに貢献した。だが、パーメンの国法やヤギェウォ朝の帝国のように、中世的な生産形態の繁栄を再度実現することはほとんどできない。小市民と農民の貧窮の増大は、国家を役立てようとする努力を増大させざるをえなかった。だが、この増大する力は、意義ある確かな成果をもたらすことのできない、無意味な努力に消尽される自暴自棄の力である。

反ユダヤ主義の指導者が、ほとんどすべて道化師やルンペンや愚か者として——彼らがこの好ましい三要素の混合を表現しないとしても——正体を表すことは偶然ではない。資本主義的な発展と最近10年の経験を見て、没落する諸階層に過去数世紀の経営形態の輝かしい復興を約束することは、非常に多くの無知や軽佻浮薄や馬鹿にふさわしい。だが、そのルンペン性と馬鹿さをより公然と表すとしても、多くの「キリスト教社会主義派」の民衆 (Volk) がその指導者に忠実であり続けることも、同様に偶然ではない。溺れる者は藁にもすがる。

だが、この忠誠は決して永続的なものを意味しない。すでにわれわれは、小市民層がどのような矛盾の中で運動しているのかについて言及した。彼らがその経済的な拠り所を失えばよくなることはない。彼らはますます道徳的な拠り所を失い、ある極端から他の極端へとよろめき歩く。今日の小市民的・農業的な諸要素にとって、そのジグザグ航路は正しい対政府策で、政府が彼らの欲求に十分に応えない場合には、ブーランジェやルエーガエーのようなジグザグ野郎さえ彼らはつくりだす。

この小市民的・農業的な潮流が民族運動とどのように結合せざるをえなかったのか理解しよう。それは反動的な傾向とその近視眼を増加させ、同時に民族対立を甚だしく先鋭化させざるをえなかった。小市民と農業者にとって、実際の諸事情が希望のないものになるほど、ますます熱心に、彼らはその憤激を放出できる贖罪山羊としての個人を探す。他の民族対立が存在しない場合には、歴史的な伝統と社会的立場が、彼に「本来の敵」としてのユダヤ人を指し示し、他の民族的敵対者が存在する場合には、ありったけの忿懣がそこに注がれる。それは無慈悲な経済的發展に対する無力な抵抗が彼らのなかに蓄積したものである。

今日では、どんなに正当な妥協提案であろうとも、小市民層に民族平和の到来を期待することはほとんどできない。

オーストリアにおいては、民族平和を求め隊列を整えているのは、一つの階級しかない。小市民的・農民の見方の影響範囲から遠ざかり、独立した階級意識に目覚めている限り、それはプロレタリアートである。

われわれは、プロレタリアートの無条件の賛美者だと自ら考えているのではない。未来はプロレタリアートのものであると、われわれは確信しているからといって、今日プロレタリアートに付着している欠

陥に決して目をつぶるものではない。だが、誰も以下のことを否定しようとは思わないだろう。すなわち、今日すでに知性、倫理的力および政治的成熟において、プロレタリアートが小市民層を遥かに超えていること、今日の民衆的諸政党——これは多数の住民からリクルートされる諸政党という最も広い意味の言葉——の中で、社会民主党が最も遠くを見通す政党であること、今日存在する大きな諸政党の中で、気まぐれでなく原則で導かれうる唯一の政党であること、である。もちろん、われわれの無節操な批判家たちは、空理空論主義や教義狂いと形容して、それを弱さだと特徴づけるかもしれない。

だが、オーストリアでは、社会民主党はそれ以上である。そこでは、ヴィーンの少数のブルジョア民主主義者と「社会政策家」を除けば、社会民主党は唯一の近代的な政党、確かに唯一の重要な近代政党を形成している。すべての他の諸政党は、すでに見たように、ブルジョア自由主義の政党も、民族的な傾向と伝統によって、過去の理想に縛られていた。東ヨーロッパの至る所で、ブルジョアジーは、封建主義と絶対主義の残滓を完全に一掃する能力が欠けているのを証明した。彼らは、至る所で、その解決が使命であったような歴史的な任務を、社会民主党に委ねた。だがそれは、オーストリアにおいて特に高い程度に達していた。そこでは、ブルジョア諸政党は伝統的な廃屋を除去しないだけでなく、さらに保護し強化しようとしている。

そこでは、社会民主党は、国家を近代的な基礎の上に据えようと努力し、それを自分の利害によって目指すよう駆り立てられている唯一の政党である。もちろんプロレタリアートは、どんな事情でも現在のオーストリアの維持に与すると主張しようとは思わない。もし今日ドイツ系オーストリアがドイツ帝国の一部になるとすれば、プロレタリアートにも一般的发展にも不利にならないであろう。だが、すでに上述したように、今日ではそれについて考えることはできない。オーストリアの分割は、トルコの分割のように、全く別の困難に出会う。オーストリアを近代国家にすることに失敗すると、それは、オーストリアの崩壊、その諸民族集団の解放ではなく、政治的状況によって短くあるいは長く続く可能性がある緩慢な解体の過程に帰着する。だがいずれにせよ、政治的・社会的などどんな進歩をも妨害することに帰着する。どんな階級も、プロレタリアート以上にそれに苦しむことはない。だからプロレタリアートは、外部からの配慮にも上からの配慮にも期待することはない。彼らは置かれた大地で活動し、その利益とすべての発展にふさわしくあろうと努力する。だが、そのためには、民族問題（*nationale Frage*）の解決が必要である。諸王国と諸邦からなる国家が、互いに自律的に居住し合い、互いに影響し合う諸民族（*Nationen*）の国家によって代わられて、初めてプロレタリアートの階級闘争を完全に純粋に展開することができる。民族（*Nation*）の独立は、どんな近代的階級闘争にとっても絶対に必要な基礎である。人民（*Volk*）はどんな点でも自由でなければならならず、プロレタリアートはその社会的敵対者に全力で対抗することができ、またその意欲があるべきである。プロレタリアートは、正常で全面的な発展のために、普通選挙、団結および出版の自由によらず、その民族（*Nation*）の独立を必要とする。

プロレタリア的なインタナショナル性（*Internationalität*）とは、民族性がないことではなく、諸民族の自由と平等を意味するのである。

民族平和を単独で開始できるようなオーストリアの組織は、オーストリアの社会民主党を手本にしている。社会民主党は、当然、今日の国土の行政区分にできるだけ依拠している。だが、民族的な境界が「諸王国と諸邦」の境界と衝突する場合には、後者ではなく、前者が決定している。ベーメン、メーレン、シュレージエンのチェコ人社会民主主義者は、今日すでに一つの連合した組織を形成している。これらの諸邦のドイツ語地域における同志たちはドイツ語を話す社会主義者の組織に属し、シュレージエンのポーランド人同志たちはポーランド人組織に属している。「オーストリアの社会民主党の全体組織は、ドイツ人、チェコ人、ポーランド人、イタリア人および南スラヴ人の諸組織の代表と執行委員会から構成されている」と、

1897年のヴィーン党大会でのオーストリア社会民主党全体組織の決定は言っている。だから、個々の民族の特別な社会主義組織の発展によって必要となり、国土の既存の政治的区分に対する考慮と一致する限りで、社会民主党は、ベーメンの二分割だけでなく、オーストリア全体の言語地方別の（nach Sprachprovinzen）連邦主義的な組織をすでに実践的におこなっているのである。

社会民主党は、他のことと同様、民族に関しても単なる当面のプログラムではなく、原則的で視野の広いプログラムを示しているオーストリアで唯一の政党である。そのプログラムは、個々の諸民族の諸利害にと同様、近代国家の現実の諸利害に対応している。民族対立が抑制され克服されているかどうか、どの程度そうなのかは、民族が発揮することのできる力、民族が見出す抵抗にかかっている。

われわれがこの点でどのような期待を抱くことができるかを見極めるのは、外部の者には不可能かもしれない。だがオーストリアに生きている政治家にとっても、それについて一定の判断をするのは難しいかもしれない。政治や戦争においては予想できないことが常に大きな役割を果たすが、オーストリアにおけるより大きなところはどこにもない。

ここでは、不十分なことが出来事となり、

ここでは、言い表すことのできないことがおこなわれる。^(訳注5)

オーストリアは経済的に遅れた国である。そのプロレタリアートは比較的弱い。民族的な相違と対立によって、プロレタリアートの教化と組織化は非常に困難にされている。だが、このことは社会民主党の拡大にとって非常に気がつきやすい障碍を意味するので、他方では、社会主義思想とプロレタリアの階級闘争に起因するよりも大きな政治的影響力をオーストリアの社会民主党がもてるようになる瞬間がそこから始まる。社会民主党は、まさに民族対立の結果として、すでに見たように、オーストリアで唯一の近代政党であり、政治的影響力を獲得して以来、どの大きな決定に際しても、国家のあらゆる近代的要素に、その見解がいかに社会主義的な見解と異なっていようと賛成投票し、手を携え強化することになった。だが、唯一の近代政党として、それは、どの大きな決定に際しても、それ自身と同じ方向への前進を迫る事実そのものの論理をもっていた。結局それは、明確で決然とした広範囲に及ぶプログラムをもつしっかりと確立した政党として、非常に異なった民族集団の不安定な錯乱した多数の小市民に対峙した。民族闘争が待望の解放をもたらさない場合には、今日の民族の敵との戦いに参加するのと同じ力と憤激で、民族集団は明日は別の敵に向かう。小市民は移り気である。2年前にも、ツィリ^(訳注6)のギムナジウムがブルジョア議員の唯一の民族的闘争目標だったとき、もはや若干の徒党以外に民族闘争により深い関心をもつ者はいないと信ずることができた。一夜にして、その徒党は——もちろん少なくともバデーニの拙劣のおかげではない——とても初歩的な権力を獲得した。また一夜にして、少なくとも一時的には、彼らは背景に退くこともありうるだろう。

このすべてが、その階級意識のあるプロレタリアートの拡張と力に相応する以上に大きな力を、オーストリアの社会民主主義に与える要因である。民族対立がオーストリアの社会民主党の拡大を非常に困難にしたので、他方では、民族平和をつくる必要が、この唯一の平和の党としての社会民主党を振興させる。それは、ドイツで政府の圧迫を減少させる熱望が、真面目な反対党である社会民主党を、経済的な発展とプロレタリアート階級闘争の拡張に相応する以上に、急速に振興させたのと同様である。

だが、その平和活動において、オーストリア社会民主党は人為的な妨害によって非常に多大な不利益をこうむった。現行の五つのクリアの拡大によって少しだけ改良された選挙法は、小市民的・農業的な諸要素に、それゆえ、まさに今日民族対立と民族的煽動が最も荒々しくなっているような諸要素に、一連の選

挙特権を与えている。その選挙特権は、プロレタリアートに対抗して、住民中の強さとは比例しない代表権を彼らに保証している。この選挙法の廃棄、選挙特権に替わる万人の平等選挙権は、たとえ民族平和を直接に伴うものでなくても、やはり民族的和解の要素を大いに強め、民族的煽動を著しく困難にするだろう。

だが、普通平等直接選挙権、選挙権におけるすべての身分的・地方的差異の廃棄は、民族集団問題の近代的で持続的などんな解決にも邪魔になっている封建的分離主義の衰退にも大いに貢献するであろう。この点でも、普通選挙権の承諾は民族平和への一歩であろう。

今日、オーストリアは一連のクーデタによって支配されている。その承認のために憲法は独自の条項を含んでいる。広く輝く大胆な政府は、今日の不安定な状態を終わらせるのを心から望んで、クーデタがその出口だと見えるので、14条を現実のクーデタに利用するだろう。——全く新しく近代的な基礎の上に帝国を置くこと、とりわけ普通平等選挙権の欽定、封建的領域境界の撤廃、新たな民族的な諸州（*nationale Provinzen*）の創設がふさわしいだろう。

だが、オーストリアの一大臣のそのような革命的な行動を、誰が期待できるだろうか？ そのクーデタは広範な活動の障害を取り除く広く輝く政治家の冒険ではなく、何もせず不快な仕事を回避したがる怠惰な官吏の策略である。クーデタは結び目を解くのに、どの方面へも最小限の貢献をすることもなく、解決を延期するのを目論むだけである。

オーストリアの将来ほど不確実で、不透明なものはない。腐敗と解体にひんしている諸関係によって、近代的な基礎の上に立つことが拒まれている諸国家がある。ポーランドがそうであるし、トルコがそうである。オーストリアもそこに数えられるべきではないのか？ 解体しつつある諸傾向を阻むことができる行動は、その支配階級には期待することはできない。帝国の将来は社会民主党の力と影響にかかっている。というのは、まさにそれが革命的政党、この場合には社会民主党が国家を保持する政党であるがゆえにである。既存の国家秩序の転覆は、オーストリアを活性化することができる。——すなわち、トルコのように植物的に生存するだけでなく、発展力のあるものにすることができる。この意味で、奇異なことであるが、半世紀前にグリルパルツァーが黒と黄の反動の英雄、ラデツキー元帥に呼びかけた言葉を、赤い革命的な社会民主党について用いることができる。

オーストリアは汝が陣営にあり（訳注7）

オーストリアにおける諸民族集団の闘争再論

同志ダシンスキの非常に教育的な詳論に対して、それに論争をするのではなく、ありうる誤解を予防するために、若干の論評をするのが許されるだろう。

同志ダシンスキの論説（訳注8）には、オーストリアにおける諸民族集団の連邦制について、われわれは民族的ブルジョア政党である青年チェコ党等を転向させることが可能で、かつそうすべきだと考えているというように私の弁護が理解される可能性がある、という心配を引き起こすような若干の論点が含まれている。それは全く私の意図するところでないし、期待するところでもない。むしろ私は、このような連邦制を、民族的ブルジョア諸政党に対抗して、社会民主党が掲げるべき民族綱領（*das nationale Programm*）だと考えている。

その実行を妨げる困難は巨大なものである。ドイツのブルジョア諸政党がこの綱領の方向に駆り立てら

れるだろうという、『ノイエ・ツァイト』第21号でベルスが述べている期待が確かめられるならば、嬉しいことであろうが、これまでそれについてはまだほとんど認められない。スラヴ人のブルジョア諸政党においては、ダシンスキの論説が明らかにしているが、そのような傾向は少しも現れていない。オーストリアの民族主義諸政党では、最良の場合に、個々の領邦において、後退しつつある民族的マイノリティの代表がそのように転向するであろう。それに対して、勝利しつつある優勢なマジョリティは、この綱領を頑固に敬遠するだろう、彼らは、封建貴族とどんな革新にも尻込みする官僚層によって強化されている。

だが、オーストリアにおける民族的連邦制の理念は、あらゆるものよりも危険だと言われているもう一つ別の敵に打ち勝たねばならない。ハンガリーである。この国家制度は、チェコの国法の理念よりも遙かに、諸民族集団の権利の完全な無視に基礎を置いている。ヴァーツラフ王冠領においては、チェコ人は確かに大多数であろう。それに対してマジャル人はイシュトヴァーン王冠領でマイノリティを形成している（総人口の40パーセント、1700万人のうちの700万人）。マジャル民族集団の貴族とブルジョアジーは他の諸民族集団の権利剥奪によってこの領域を支配できるにすぎない。必然的に、ライタ川とカルパチア山脈を超えて浸透する、隣接する「ツィスライタニエン」[ハプスブルク君主国のうちのイシュトヴァーン王冠領以外の部分]の諸民族集団の連邦制の理念よりも、その暴政と搾取体制を危うくする可能性のあるものはない。だが、ハンガリーの支配階級は、ハプスブルク君主国全体の支配者である。ホーエンヴァルトを失脚させ、ベーメンの国法の実現を妨害したのは、主に彼らだった。彼らは、隣邦における諸民族集団の連邦制の実行に反対して爪と歯でもってより決定的に抵抗するだろう。これを実行しようとする者は、オーストリアの封建貴族、官僚層、民族的多数者とだけでなく、ハンガリーの支配階級とも折り合いをつけなければならない。

そして、この連邦制をその綱領に掲げる政党はただ一つ、社会民主党だけである。

それゆえ、われわれの民族綱領の実現についての幻想をもつことはできないと、ダシンスキが考えているなら、私は彼に完全に同意する。私は、諸民族集団の連邦制の理念を、オーストリアの今存在する困難に対する実践的な、即時実行すべき解決策としてではなく、オーストリアで社会民主党が差し迫った闘争で用いる民族綱領と理解している。社会民主党は、その綱領の提起に際して、支配階級と諸政党をそのために獲得すべきか否かを問題にするのではなく、それが必要か否かを問題にする。社会民主党は、今日の権力要因の形成に際して、それが実現される見込みがあるか否かを気にせずに、必要だと認めるものを要求する。

私の見解では、オーストリア社会民主党は、常備軍の人民軍への転換と同様に、諸民族集団の連邦制を要求する権利を完全にもっている。

だがおそらく、常備軍の廃絶よりも、諸民族集団の連邦制のほうが、近日中に実現する見通しがある。社会民主党の他に、事実の論理がそれに有利に働いているからである。その連邦制は、オーストリアがなお若干の期間を与えられる場合には、諸邦において一つの耐えうる存在になる唯一の可能性を提供する。

だが、オーストリアがそれより長い間持続することはありそうなことだろうか？ その遠心的な傾向は、それが近いうちに崩壊せざるをえず、解体するに違いないほどに強くないだろうか？ それは以前の私の見方でもあった。だが今日、オーストリアの民族集団問題（Nationalitätenproblem）のこのような解決に立ちふさがる困難は、諸民族（Nationen）の連邦制が出会うそれよりもずっと大きい、という確信に私は到達した。オーストリアの崩壊は、この君主国自身における革命だけでなく、ドイツやロシアにおける革命をも前提する。遠心的傾向は存在するが、崩壊しつつある諸部分が飛んで行くことのできる余地はない。

今日、オーストリアの近隣は、どちらもその分割に何の関心もない。ドイツもロシアも、内部の困難と戦うのに忙しく、両国の政府は内部の反対派が強力になり増大するのを見るのを望まない。そしてここで

も、ベーメンは大きな躰の石をなしている。それは誰のものになるべきか？ ロシアか？ 青年チェコ党はなおツァーリに非常に夢中になっているかもしれない。今日ロシアの絶対主義は危険にさらされているので、あえて約1500万人の人口のオーストリアの北部スラヴ人諸州（nordslavischen Provinzen）を併合し、その国土に、少なくとも英国やスイスの住民と比較できる一世代以上の自由な習慣に親しんでいる、ロシアの今日の体制には全く相容れない、強力な住民を編入する必要はない。だが、プロイセン＝ドイツも、——アルプス地方と並んで——ヴァーツラフ王冠領をその領土に併合する動機はない。それがすでにバイエルンの「臣従」に満足して、数百万のチロール人、上部オーストリア人、シュタイアーマルク人等々によって臣下を増やそうとは全く望むことがありえないので、ポーランド人、デンマーク人、エルザス人に、600万人の（ベーメン、メーレン、シュレージエンの）チェコ人を付け加えたいと望むことも一層ありえない。

だが、他方で、ドイツは、ロシアがベーメンに根付くことに耐えられない。ツァーリ体制の内部事情のためのベーメンの獲得はとても不都合なことになる可能性があるが、ドイツに対する、それどころかヨーロッパに対するその戦略的立場は、それによって輝かしいものになるだろう。それはドイツを二つに分割し、西方に対する出撃門を手に入れることになり、これ以上都合の良いことは考えられないほどである。

だが、独立した「ヴァーツラフ王国」にも、ドイツは耐えられない。この王国は小さすぎて、強力すぎる隣国に取り囲まれていて、実際に独立し続けることはできないだろう。より強力な国の委託と保護を探さねばならない。当然ロシアであろう。ツァーリ帝国のチェコ人は御し難く望ましからぬ従者であるほど、忠実な同盟者や臣下となるだろう。ドイツにとって、ベーメンがロシアの一部であるのと同じく軍事的危険であろう。

ベーメンの独立がポーランドの再建と手を携えると、事態は異なる。その場合、ポーランドはロシアの敵対者で、チェコ王国の自然な同盟者であろう。

だが、今日の状況がどうであれ、オーストリアの崩壊はポーランドの再建を意味するのではなく、ロシアの専制の支配体制へのガリツィアの従属を意味する。それゆえ、ベーメンがロシアのものになるのか、独立するのか、ドイツにとってベーメンをめぐる生死をかけた闘争が始まるに違いない。誰も他者に喜んで与えず、誰もそれを欲しがらない戦利品をめぐる闘争である。

だから、今日ロシアとドイツは、オーストリアの分割に何の利益ももたない。それは、トルコとオーストリアで、権威ある勢力が現状維持のために努力するのと同様である。

オーストリアを纏めているのは、せいぜい官僚層と軍隊に無為に生息しているオーストリアの「国家思想」ではない。それは、遠心的な諸傾向に対抗する内的な絆ではなく、遠心的な諸傾向が最も強力なところにオーストリア君主国を制限するドイツ帝国とロシア帝国の堅固な輪である。だから、多様な諸王国と諸邦と一緒に居続けなければならないのは、そのどれもが独立して存在するには弱すぎるからである。

それでも、英国以外の全ヨーロッパで革命的運動の時代を迎えているように思われる。スペイン、イタリア、ベルギーの王冠は由々しいほどに揺らいでいる。フランスとドイツでは、クーデタが非常にしばしば議論されている。オーストリアでは、内戦がすでに始まっているとさえ見える。われわれが予期しなければならないのは、バリケード戦ではないし、1848年のようなすべての醜悪な政府に対する人民（Volk）の全階級の闘争でもなく、何よりも分裂した人民大衆（Volksmassen）相互の統治をめぐる苛烈な闘争である。その前触れは至る所にあり、対立はますます先鋭化し、情熱はますます荒々しく声高になっている。われわれは、ヨーロッパの相貌を全く変化させ、その結果オーストリアの諸民族（Völker）の遠心的諸傾向に自由な活動の余地を与えるような、革命の時代に向き合っているのかもしれない。

それはありうるし、ありそうなことでもあるが、だが、そうなるだろうとは、決まっているわけではない。オーストリアの崩壊は、政治家が注視しなければならない不測の事態であるが、政治的な行動のため

の綱領ではない。政党は起こりうることに目をつぶることはできないが、その実践的政治行動は、現実基礎付けられねばならない。オーストリアはなお存在し続け、この国の社会民主党は、多分なお数年間その枠の中で活動しなければならないだろう。社会民主党は、将来の和解によってだけでなく、所与の土台の上で実現できる綱領によって、民族闘争に関与することができなければならない。だが、そのような綱領は、私が見る限り、社会民主党の活動から有機的に生じ、その隊列そのものに適用されるものだと見なされるべきである。諸民族集団の連邦制（Föderalismus der Nationalitäten）の綱領である。

別の社会主義的な民族綱領（Nationalitätenprogramm）は、私には、なお知られていない。

諸民族集団の連邦制に達することに成功しないなら、オーストリアが、常に高まる内部の全身痙攣のもとで、崩壊に向かうのは確実である。そして、その連邦制の実行の見通しが非常に小さいことは確かである。

だが、諸民族の和解のための綱領の作成が余分な仕事だと思われるほどに、崩壊が不可避で差し迫っていると考える機会を社会民主党がもつような場合でさえ、その実践的活動は必然的にあの綱領の方向に、遠心的な諸傾向に対立するものにならざるをえないであろう。

では、「遠心的な諸傾向」とは何であろうか？ それは民族的な諸対立（die nationalen Gegensätze）である。オーストリアの崩壊を狙う政党は、これらの諸対立を極度に煽り立てて、様々な諸民族（Nationen）の間の深淵を広げるのに適したあらゆる方策を支持するに違いない。その場合、社会民主党は、国際的な政党（internationale Partei）として、それと協働する必要もないし、能力もない。むしろ、党は諸民族の和解（Völkerversöhnung）の意味で断固として行動し、諸民族（Nationen）の間の深淵を架橋するのに適したどのような方策をも支持する。それゆえ、望もうと、望まなかりと、意識的であろうと、無意識的であろうと、その綱領に基礎付けられてようと、状況に迫られてであろうと、社会民主党はオーストリアで帝国を纏める政策を擁護し、その崩壊を助長するあらゆることと闘う。従って、私がすでに以前の論文で強調したように、党にとってオーストリアの国家思想はどうでもいい、むしろ同調できないものではあるが、その意味で社会民主党は、今日決定的な影響力をもつ勢力なのである。

《原注》

- (1) さらに特別な問題を示しているルーマニア人とイタリア人については、ここでは捨象する。
- (2) W. Rogge, *Oesterreich: von Világos bis zur Gegenwart*, 1. Bd., S.8. ロッケ（Walter Rogge: 1822-1899）は断固たるドイツ・自由主義者にしてスラヴ狂。

《訳注》

- (1) 本稿はKautsky, Karl, *Der Kampf der Nationalitäten und das Staatsrecht in Oesterreich*, in *Die Neue Zeit*, Jg. 16, 1898, S. 516-524 u. S.557-564, およびNochmals *Der Kampf der Nationalitäten und das Staatsrecht in Oesterreich*, in *Die Neue Zeit*, Jg. 16, 1898, S.723-726の翻訳である。
- (2) Friedrich I. (1122-1190): ホーエンシュタウヘン朝の神聖ローマ皇帝（在位:1152-1190）。バルバロッサ（赤髭王）と呼ばれた。
- (3) Leander Starr Jameson (1853-1917): 英国の植民地政治家。
- (4) Kornblumenritter: 和名ヤグルマギクは、プロイセン王室のゆかりの花。「ドイツ帝国の国花」と呼ばれることがある。
- (5) Goethe, J. W. v., *Faust II*, Stuttgart, 1832, Vers 12104 ff.
- (6) Cilly (Cilli): 現在のスロヴェニア第3の都市ツェレエ（Celje）。ハプスブルク時代にはシュタイアーマルク公領に属した。19世紀と20世紀の交わりの時期には、反スロヴェニアのドイツ愛国主義の中心地であった。
- (7) Grillparzer, F., "Feldmarchall Radetzky" in *Sämtliche Werke, Bd. 1, Gedichte, Epigramme, Dramen 1*, München, 1960, S.230.
- (8) Daszyński, I., "Die Lage in Oesterreich", in *Die Neue Zeit*, Jg.16, 1898, S.718-723.